

## 六、還曆と自誨

### 1 永遠の現在

孔子は、十五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳順い、七十にして行つて矩を踏えずといつております。私は今日まで人生の大きい節々においても、そうした崇高な発心やゆるぎのない自信もなく、ただ漫然と馬齢を重ねるうちに、到頭六十歳を迎えてしまいました。かくしていわゆる停年期も過ぎ、敬老会に仲間入りする資格さえもできたのであります。といつて白樂天の詩に非老亦非少という言葉がありますが、そのように若くもないが老い込んだとも思っておりません。

顧みると、その間、私なりに色々なことがあるにはあつたが、大きい飛躍もない代わりに惨めな失敗もない、いわば平々凡々たるものであります。最も平凡に終始するということは、至難

のことです。雨の朝にも風の夕にも、得意の時にも失意の際にも、平常心を以て対処することは、確かに立派なことです。私の六十年の生涯は、そんな素晴らしいものではなく、ただ幸運にも大きい波風が立たなかっただけのものであります。

宗教や哲学において、「永遠の今」ということが問われております。現在というものは未来を指向する力と過去のもつ引力という相反した方向に働く力の緊張した相剋の中にあるもので、われわれにとってはかけがえない尊い唯一無二のものであるといわれております。そして時間はいつも現在という衣を着けてわれわれを訪れるものである以上、現在は永遠であり、襟を正して立向かわなければならぬのだといわなければなりません。人生は、従って、日々刻々の真剣な実践の連続以外のものではないので、それに人為的な節を設けることは、便宜論以上のものではないと思います。先に述べた孔子の述懐も、人生に節を設けるところに意味があるのではなく、日々の実践を通して達し得たその時点における孔子の自信にアクセントをおいたものだと見るべきでしょう。還暦を迎えた私は、これまで日々の実践において果たして悔いのない全力投球してきたかという点、これまたそんなに充実した自信に満ちたものではなく、いわば中途半端で生半可なものであったと告白しなければなりません。しかし平凡なこれまでの一日一日は、尊く有難いものであったとして、感謝しなければならぬと思っております。

## 2 六十年間の变革の跡

私が生まれたのは一九一〇年で第一次大戦の始まる四年前でした。西讀の中農の二男として生まれ、南に阿讀の山並を仰ぎ、西に燧洋の銀波を見下しながら、郷里で小学校と中学を了えることができました。それからの六十年は日本にとつても、世界にとつても、いわば有史以来空前ともいふべき激動期でありました。それこそは、文明の最後を飾るものであるともいふことができます。例えは歴史が始まってから私の生まれた一九一〇年までに、人類が掘り出した鉱物の量より、この六十年間の採掘量の方が多いいことです。いわば圧縮した歴史のパノラマを、私は同時代の人々と共に、高速映写機で見せてもらったようなものだと思います。

先ず日本と世界を捲込んだ二つの大きい戦争がありました。兵器の開発は異常な速度で進み、その物理的破壊力は、質量共に加速度の増大を見ました。今日、局地的なゲリラ戦といわれるベトナムの戦いにおいて、ベトナムの一部隊がもつ火力であつても、優に第一次大戦に参加した大國のそれに匹敵するともいわれております。通常兵器においてさえそうであるが、核兵器となる

と、その破壊力は計量を超えた途方もないので、学者はこの兵器を最終兵器と呼んでおる程です。そしてこの兵器が奉仕するような状況を考えてみると、それは最早勝ち負けを争う従来の戦争ではなく、交戦する何れの側をも破壊に導き地球自体をもこわしてしまふ程のものになったのであります。

戦争自体のもたらす物理的な破壊に加えて、戦争に伴うインフレは、経済機構の破壊と経済活動のマヒをもたらしたばかりでなく、社会の秩序と構造、人々の地位と運命、更には目に見えぬ精神の深層にまで、根底からのゆさぶりをかけたのであります。日本にとっては、更に軍隊や財閥の解体、地主や支配階級の没落はいうまでもなく、憲法とそれに依拠した制度や組織さえもが否定されるという結果をも招いたのであります。

次に、科学技術の革命的な進歩がありました。その最も象徴的で集約的なものが、アポロ11号の成功であります。科学技術の発達は、広く生産、消費、交通、通信はもとより、政治、行政、教育、情報その他われわれの生活を取り巻く環境はもとより、人々の意識の世界にも大きな変化を与えました。それは善い意味でも悪い意味でも大きい変化でありました。未来に対するオプティミズムは色褪せ、鉛のようなペシミズムが、人類の大いなる苦悶を彩っております。最近学者はこの時代を「非連続」の時代として捉え、今日の政治、経済或いは社会の構造変革は、最早過

去の経験や知識では到底把握できない新しい時代が始まったといっております。これだけの広般にわたる深刻な変化は、歴史上空前のことでありましょう。

第三に、世界の構造が大きく変わりました。かつて七つの海洋に勢威を誇ったヨーロッパは昔日の栄光を失い、これに代わって米ソという二大巨人国家が出現いたしました。その後、暫く世界を二分して米ソ間の冷戦的対立が続いたが、それが漸く平和的共存に移ったかと思うと、たちまち中ソ間の対立が始まったのであります。そうした中であつて殆どの植民地は解放され、旧植民地は独立をかち得て、それぞれみずからの必要とその充足とを目標して険しい自立の道を歩むことになり、南北問題が世界史に新しく登場してきました。一方、かつて権威をもつかに見えたイデオロギーは、漸くその生彩を失い、イデオロギーの終焉を告げる向きさえ出てまいりました。かくて世界は一見多彩で多極的な構造をもってきたが、交通、通信の長足の進歩による物と知識の交流は、この世界をより小さい、より敏感な生活圏に仕立上げてしまいました。その意味において、一今日の世界は、中世の一小都市よりも小さく且つ敏感なものになってきたといえます。

### 3 反省と自誨

ところがその間にあつて、私は大きい波瀾もなく、生き抜くことができました。私はただ生き永らえさせて頂いた許りでありません。貧しい中にありながら、父母や兄弟の慈愛と理解に支えられて、特別のひがみや生活上の痛苦を味うこともなく、大学まで進学させてもらいました。そして学問の香りを嗅ぐことができ、よき師とよき友を得ることができました。卒業と共に大蔵省に拾われ、ここでも多くの相許したよき先輩と友人に恵まれ、数々の貴い経験を積むことができました。また、どうしたはずみか遂に徴兵からも免除され、空爆下の東京で何度か身の危険にさらされ、住居や家財は戦災で全焼したというものの、自分と家族の安全と衣食の充足だけは不思議にもこれを保つことができたのであります。昭和十二年に結婚して四人の子女をもつたが、長男を病気で失つた他は、他は何れも息災で成人いたしました。

昭和二十六年、勧められるままに政界出馬を決意しましたが、翌年十月の初当選を含めて、私は今日まで総選挙を八回闘つて八回勝つことができました。徳望や才幹に恵まれない私が、先輩の知遇を得て、昭和三十五年七月、内閣官房長官を拝命して以来、外務大臣、通商産業大臣、政

調会長等の要職を歴任させて頂きました。または激しい政治生活にあり勝ちの経済的窮迫も、先輩や友人の暖かいきもいりで、殆ど経験することがなかつたのであります。

すべては夢のようであります。勿体ない位です。しかし、はしなくも私に恵まれた幸運の連続は、いわば私の一身上にかかることであつて、他者の立場から見ると別段の意味があるものとは申されません。若しこの六十年間を通じて、私が国や郷土に対し、或いは政界や友人、総じて自分以外の他者のために、その処遇と恩顧、友情と支援に対して、何か意味あるものを為し得たとすれば、そこにはじめて私の人生の意義が多少なりとも評価されることになるわけです。

なるほど、私の郷里をとつてみても、私の関与し或いは推進した事蹟は、確かに相当数数えることができなくてもありません。学校や教育施設、河川や堤防、道路や林道、港湾や漁港、溜池や水路、農道や農業基盤、街路や上下水道等、各市町村に残るこれらの事蹟には、確かに、私の丹精の滴が残っております。備讃瀬戸航路の俊喋と番の洲の開発、吉野川の導水事業、瀬戸大橋架橋の促進、一連の塩業近代化の推進、三豊干拓の着手と完成等は、私が情熱と心血を注いだ主なるプロジェクトであります。中央地方をつなぐ政治のコミュニケーションや、子弟の進学と就職の斡旋、県内公私の団体企業の経営上の相談等にも、不十分ながら、私なりの努力はしてきた積りであります。議員乃至は党員として、或いは國務大臣乃至は党役員として、内政外交を通じ

ての国や党に対するこれまでの私の奉仕については、世人の評価に任せて、ここでは改めて叙述しようとは思いません。これらの一切のことは、しかしながら、正直のところ、自分に与えられた公私の義務を曲りなりに、大過なくやりおおせたというだけのもので、特に誇るに足る功績であつたとはいえないように思います。

一方、私は、自分から意識して、他者を欺いたり、他者に負担や迷惑をかけたたりしないよう極力みずからを戒めてきた積りですが、それは単に人間としての他者に対する消極的義務であります。しかし至らない私ですので、自分の怠慢や不注意によつて、或いは一寸した誤解や中傷に基づいて、無意識の中に他者に迷惑をかけ或いは他者に不快の思いをさせるようなことが数多くあつたのではないかと恐れております。

このように私は、これという取柄のない六十年のみずからの生涯を通して、数多くの友情と好意に支えられ、健康と幸福を享受して公私にわたる自分の仕事を、ともかくも大きい過誤なく手がけてまいることができたのであります。ここでその貸借対照表を作つてみるとしたら、一体それはどういう姿のものになるのであろうか。おそらく、その姿は、借方に借記した数字があまりにも大きく、貸方に貸記した数字がそれに較べてあまりにも少ない、いわば大きいアンバランスの姿を呈しておるにちがいないように思われてなりません。



還曆を迎えて、私は六十一年目の坂に差しかかっております。これからの私の任務はいうまでもなく、この借記した数字をカウンター・バランスするために、貸記すべき数字をどのようにして記録して行くかにかかっております。西洋の諺にも「人生は七十から」というのがあります。六十の発心も決して遅きに失するものではない筈です。貸記を多くするためには、私は先ず、できる限りみずからの奢りと怠慢を戒めつつ、他者のために生くる工夫を重ねなければなりません。即ち己の好悪や地位の高下に捉われず、寛厚と誠実を以て人に接しなければなりません。また事の公私や大小、更にはその繁閑や難易に拘わらず、真剣に事と取組まねばなりません。事の中にあつて事を究め、事の外にあつて事に処してまいらねばなりません。また六十の手習ではあるが不断の学習に一段と力を入れなければなりません。かくて栄辱は天に問い、進退は命に従つてまいるべきだと思ひます。これが、これからの私にとつての自誨の道標であり、このことを見失う限り、私のこれからの生涯は無意味である許りでなく、遂には不毛に終わることを恐れております。先輩友人各位の一層の御叱正と御鞭撻をお願いいたします。